

# 銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

<https://zuioji.jp>

奇数月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

## 碧巖録物語独語【三十九】

後堂 門原 信 典

第十九則「俱胝一指頭」寐語②  
抑下托上(4)

【評唱】玄沙師備禪師のこと。(三)

いつも飄々として洒脱な御老僧が居られました。神戸の般若林僧堂で秦慧昭禪師(永平寺六十八世)に参徹されます。永平寺七十六世秦慧玉禪師とは知音の間柄だったと伺っています。「ワシは坐睡が得意でな」と「臥牛」と号しておられました。

【理屈と膏葉】

場面は忘れましたが「マア理屈と膏葉は後でなんぼでも付けるわ」と独り言のように言われたのを思い出しました。これは昔からの言い回しのようにですが「グダグダ云わずに黙って

出家します。その菩提心と昼夜の辨道に依つて開悟され、謝三郎の父親も成佛します。

葬儀も法事も佛道修行です。

お坊さんは故人だけではなく遺族も親族も参列者も同事行として佛道に引き導くのです。

回向に「普く世間を導いて同じく覚路(覚りの道)に登らんことを」とあります。皆さんの修行の功德で間違ひなく成佛されます。人天の導師とは人間界、天上界のみならず、六道に迷う全ての衆生を佛道修行に導くのです。

さて、今回も膏葉どころか屁のツッパリにもならぬ理屈を付けます。

【お釈迦様の方便―異説孟蘭盆経】

孟蘭盆会の始まりとされる佛説孟蘭盆経は「あらゆる出来事を見通す力を身に付けた目連尊者が、餓鬼道に堕ちた母を探し出し、お釈迦様の教えによつて救う」という物語から始まりました。目連尊者のお母さんは生前に「我欲」という「貪り」の心が強すぎて「餓鬼道」と云う永遠に救われる事の無い飢餓の世界に生まれ変わっていました。「貪り」は「瞋り」を生み「愚癡」

を招きます。それは「無明」を背景にした「我欲」の現われです。お釈迦様は目連尊者に「今この祇園精舎で三か月の雨季の間ひたすら佛道修行をして

いる弟子たちに、その修行が円満に成就するように、ありとあらゆる施しをなささい。

その陰徳で修行を無事終える七月十五日に修行僧の感謝の心が巡り巡つてお母さんは餓鬼道から解脱するであろう」と説かれます。神通第一と云われるお釈迦様の十大弟子のお一人で、しかも容姿端麗、

多くの佛弟子から尊敬の眼差しを集めていた目連尊者が何故この事に気が付かなかったのか。もしかしたら目連尊者には自分自身の神通力に執着する自尊心が強く、自分の母親だけ救えば良いと云う「我欲」がほんの少しでもあった

のではないのでしょうか。さすがの目連尊者も、自分の心だけは見通すことが出来なかったのです。佛典には目連尊者は神通力によつてお釈迦様の教えを邪魔する鬼神や龍を降伏させたり、異端者や外道を追放します。そして恨みを買

団の長老の一人であった提婆達多の弟子たちに暗殺されかけたとも伝えられています。それは一切衆生を救うというお釈迦様の願いとはかけ離れていました。

お釈迦様は一計を案じます。目連尊者が亡くなった両親がどうなっているか探している事を知り、お釈迦様はその神通力を包み込む智慧と慈悲の法力で、目連尊者にお母さんが餓鬼に生まれ変わっているところを見せるのです。そしてお母さんを慕い想う心をそのまま修行者に回向し、辨道の資助になるよう勧めます。

その供養により、お母さんは無限に続くはずの飢餓の苦しみから解脱します。それだけではなく目連尊者も他を思う心に目覚め、苦界に沈淪している全ての人達も救われます。それは祇園精舎での目連尊者の施しの心、施された物、それを受けた大勢の佛弟子の三輪(三つの働き)が成し得る

清浄な佛道修行の廣大無辺の功德です。それがお釈迦様の智慧と慈悲に依る方便でした。「佛祖憐れみの余り広大の慈門を開き置けり」というお示し

は「ただこれ志のありなしによるべし、身の在家・出家にかかわらず」とあるように在俗の中に在っても六道の内に迷っていてもみ佛様はその手の平を差し出して下さっています。その志、つまり菩提心が現れる時節因縁をひたすら信じるのみ、それが「不待」です。釣り人謝三郎もみ佛様の智慧と慈悲に包まれてみ佛様の身体を持って魚釣りをしていたのです。葬儀も法事も「不待の行持」。必ず佛縁は熟します。

### 【是身非有、痛自何来】

一般的に「この身は有に非ず、痛何れより来る」と読まれています。

「此の身体も心も私の物ではない、実体は無い。だとすれば、この足の痛みは一体どこから来るのか？」となります。確かにその通りです。

「病氣は心の迷いや誤ったとらえ方が現れたもので実体はない。だから教祖の云われる真理を観じることで癒やしに向かう」という宗教団体もあるそうです。しかし、やがて必ず命は終わるのですから、病や死

から逃れることは出来ません。生きている限り四苦八苦も間違はなく「生縁」です。

ここはそのまま「ゼシンヒウ、ツウジガライ」と読みます。

先ずは「是身非有」です。「是」は「これ」という指示代名詞。加齢と共に物の名前、特に人の名前が出てきません。高齢の方同士が長年のお付き合いで意味が理解できるのか「これがそれしてあれだがな」と云うような不思議な会話をされていました。私も既に高齢者の仲間入りをしましたが、それだけでなく適当な私は聞く人の事も考えず、通じても通じなくても「これ・それ・あれ」と情性で使っているようです。しかし、よくよく考えてみると、成るほど此の世界に存在している全ては「これ・それ・あれ」としか表現出来ません。「これ」が入れば「こそあど言葉」になります。

例えば私はお寺に生まれ育っていますが、俗名は「のぶみち」です。からこの年齢に成っても「ノブちゃん」と呼んでくださる方もあります。呼び名は「和尚さん」「方丈さん」住職は一丈四方の部屋に居るこ

とから方丈の間の和尚という意味です。「お寺さん」「お住持さん（おじゅっさん）」等々あります。それはあくまでも世間的な関わりの中での約束事で私は私です。「この・その・あの」としか云いようが無い本来の私です。

### 【非の有―坐禅】

「死」こそは生前の仕事も役割も名前も性格も個性も、それまでの人生で培ってきた個人的な価値観も、名利を求め人間の臭みも、好き嫌いという感情も全て関わりの無い純粋な生命の働きです。「非」はあらゆる人間性を打ち消した字です。私達は何かに執着していないと生きていけません。その一切のとりわれ、こだわりを脱ぎ捨てた「非」の「身」であり、ただみ佛様のおん命「脱落」であり「非の有」とは坐禅している私です。

此の身体は焼けばたちまち灰と成り、埋めばやがて土と成るのです。今までの人間生活の一切の関係も約束事も無くなりします。それはとても淋しい事です。それをよく知っているから、あの世もあつて

欲しい。輪廻も転生もあつて欲しい。天国から見守っていて欲しいし、お盆には帰ってきて欲しいのです。

故人と共に過ごしてきた「時」も「生縁」です。故人を偲ぶ事は、故人を生かしてきた全ての「生縁」も「時」も偲ぶ事になります。生かされている「私の時間」は、「生縁」と共に生まれて「生縁」と共に死にます。今の自分を本当に生かす生き方とは、天地の恵みも衣食住の環境も、私に良い事も悪い事も全てをいただき感謝する事です。その「生縁」には損得も、幸不幸も、駆け引きも、人間が思う役に立つとか立たないとかの功利的な意味はありません。私の満足感でもなく、誰かを満足させることでもありません。ただお互いに生きている、その事が尊いのですから。

世はいかにありとも、人はいかにありとも、愚かしきことのいかに多く我を悩ますとも、ただ「生縁」を生かす。それが坐禅から始まり、み佛様と共に歩む佛道修行者の道です。

私は今此処で、吐く息吸う息から始まる身体の機能も含めて、周りの全てに支えられて共に生きています。

### 【自利利他円満具足】

その生きている事の仕組みは佛法僧の三宝です。

あの世もこの世も含めて、この宇宙で三宝の仕組みから外れる物はありません。たった一人で、単独で存在している物はありません。「み佛様のおん生命、生き生き法と働きて生かし生かさる僧となる」

宝という字なので何かの持ち物のように思いますが、お互いの生命を重んずる、尊ぶべき教えです。

今、何を考えているのかわからない利他的な事件が増えています。何も考えていないと云うより、考える能力が無くなり、「我欲」しか見えなくなってきた証拠です。とうとう人類は「餓鬼道」へ堕ちてしまつてしまうのか。

「自ら利み人を利む法は皆具足せり」とお釈迦様は共に生きる道をお示しです。

「今日彼岸 菩提の種を蒔く日かな」と松尾芭蕉翁は春に詠まれました。今年も九月「秋自何来」です。「み佛のみのり（御法・実り）豊かに秋彼岸（詠み人しらず）をお迎えしましょう。（続く）」



# 酒呑み儒学者の痛快大乘経典パロディ

『仏説摩訶酒仏妙楽経』解説(1)

高岩寺 来馬明規

東京東鴨とげぬき地蔵尊高岩寺住職 医師 医学博士  
東北福祉大学客員教授 日本禁煙学会役員

## 【はじめに】

今回・今回は江戸時代の儒学者・文人 亀田鵬斎が遺した飲酒讃歌『仏説摩訶酒仏妙楽経』(『酒仏経』)をご紹介します。(1)～(6)【図1・2】

『酒仏経』は飲酒の悦楽に関連する、あらん限りの中国古典の名句を、大乘仏教経典の形式に盛り込んで撰述した、「戯文」にして「擬装仏教経典」です。しかも私たちに馴染みの深い読誦用の経本を模した「板刻の折本」になっています。悪ふざけやパロディとしては「相当気合いの入った」仕上がりになっています。(4)(5)

## 【亀田鵬斎について】

亀田長興(号を鵬斎 宝暦二・1752)～文政九・1826)は現在の群馬県生まれの儒学者・文人です。江戸日本橋の商家に育ち、幼少期から漢文・書道に天才ぶりを発揮し、師匠の井上金峨(1732～1784)や周囲を驚かせていました。そして二十代で私塾を開いて武家商人たちの尊敬を集め、千人を超える門弟を抱えていました。(6)

鵬斎の学問は金峨を受け継ぎ、

自らの見識によって諸説を取捨する「折衷学派」でした。

おおよそ学問の道は自ら得るにあり。なお良工の木を攻めるがごとし。その可なるものを取りて用い、不可なるものはこれを棄つ。

【攻】元は玉・金属を加工すること。転じて深く研究する(例 専攻科目)

師匠 金峨の自由な学風は、仏典を換骨奪胎し「酒仏経」を作った鵬斎のパロディ精神にも大きく影響していたと思われまふ。しかし鵬斎は松平定信の寛政の改革(1787～1793)で打ち出された「寛政異学の禁」に反対し、幕府が正学と定めた儒教主流派の「朱子学」から外れた、異端の学問として排斥されてしまいました。

信念を貫いたがゆえに鵬斎の塾は閉鎖され、多くの門弟を失って隠居を余儀なくしてしまつたのです。この後、諸国を旅行。越後の大愚良寛と相見。江戸下町の酒徒・文化人として、生涯にわたって交流した画家の谷文晁や、酒井抱一

とともに「下谷の三幅」(掛軸の三幅ワンセット)と呼ばれました。鵬斎晩年の作『酒仏経』にもこの二人が絵を寄せています。【図5】

## 【解題・あらすじ 先行研究】

『酒仏経』は酒の化身「酒仏」が地面から釈尊の前に現れ、蕩々と飲酒の功德を説き、それを釈尊が賞讃する奇想天外な経典です。筆者は今までお経が縁遠かつた皆様が、パロディを通して本物の仏教経典により深く親しむきっかけとなることを願っています。そしてこの経典を通して飲酒の愚かさに気づき、笑いながら酒を卒業してくだされば、さらにありがたいと思います。

【図1】 亀田鵬斎像 谷文晁の作品の模写 (Wikipediaより)



【図2】『酒仏経』表紙(6)より



本経典は、駒澤大学名誉教授石井公成先生の緻密な先行研究(1)によって出典探索がほぼ網羅され、訳も完成された感がありますが、本稿では図譜を加えて再構成し、一般向けの記事として紹介します。

## 【本文読み下し】

### 仏説摩訶酒佛妙楽経

鵬斎 亀田長興

① 是の如く我聞く。一時、仏、酣暢無懷山に在して、七賢八仙と俱なりき。一切の酔龍、酔虎、醸王、糟侯、鯨飲、海吞、狂花、病葉、飲場害馬、酣笑、酒悲、人非人等、十方より来たり。

② 爾時に世尊、壺中の麴世界の顚大乘の法を説き已りたもう。重ねて摩訶酒仏の功德を演説して曰く。是の仏、衆生を饒益し、聖凡を別たず、能く一切衆生をして樂を得、苦を除き、醉眠酣歌、身心清浄、永く蓋纏を離れ、阿耨多羅三藐三菩提心を得せしむ。故に其の功德を称して忘憂の物と曰い、また掃愁の筭と曰う。その風味を称して沆瀣と曰い、また甘露醞醕味と曰う。菩薩常にその智を借りて己の慧業を消す。故に私に称して般若湯と曰う。

## 【現代語訳】

酒の化仏が飲酒の安楽を説く経

亀田 鵬斎

① このように私は聞きました。ある時釈尊は酣暢無懷山に滞在されました。七人の酒飲み賢者、八人の酒仙も一緒にいました。それどころか酔っ払いの龍と虎、醸造の王、酒かすの領主、クジラのような大酒飲み、大海のような大酒飲み、怒り上戸、眠り上戸、理屈上戸、笑い上戸に泣き上戸、キンナラ(衆神)などがあらゆる方向から集まってきました。

② その時、釈尊は酒つぽのなかに広がる酒世界の大乗の法を説き終わりました。さらに「摩訶酒仏」(大いなる酒の徳を示す如来)の功德を説き明かしました。「酒仏は衆生を利益するにあたり、聖人・凡人を分け隔てしません。(平等に扱って、線引きしない)一切衆生が樂を得て、苦しみを除き、心地よく眠り、上機嫌に歌い、身も心も清らかなり、煩惱を離れ、無上の真実なる完全な悟り」が得られます。その功德は「憂いを忘れるもの」「愁いを掃き飛ばすホウキ」と称されます。そしてその風味は「仙人の飲物」とも「甘露」「醞醕」とも称されます。菩薩たちは常にその智慧を借りて、自らの賢しらな

分別(理智・理性)のはたらきを消し去るのです。そのようなわけで、陰でこっそり「般若湯」とも呼ばれているのです。」

### 【続本文読み下し】

③ 若し衆生ありてこの経を受持し、この仏を恭養せば、百由旬の内、諸の災患、苦惱、悪夢、悪相、諸の不吉祥なし。刀杖も触る能はず、毒薬も害する能わず、魍魎も便りを得ず、鬼神も祟ること能わず、邪気もその四体皮膚を犯す能わず。一切の諸病を断じ、永く醉郷の安楽国に生じて、速かに菩提を証すと。

④ 爾時に、大地六種に震動す。酒仏、地より出現して左手に蟹螯を持し、右の掌に一大白を捧じ、一声の獅子吼をなして仏に白して曰さく。世尊、我に一種の米汁あり、実に百薬の長たり。よく憂悶菩薩を慰諭す。その香、十方諸仏、人天の香に比するに、最大一たり。すなわち大白を引き、米汁を満たし、甲を蘸して仏に献ず。その香、普く無懷山、及び三千大千世界を熏す。

### 【続現代語訳】

③ 「もし衆生がこの『酒仏妙楽経』を信じて護り、酒仏を敬い尽くす

ならば、百由旬もの広い範囲には災害、苦しみ、悪夢、悪相や様々な不幸がなく、刀や武器がもたらされても人々の身に触れることなく、毒薬も人々を害することができず、魍魎(わうりやう)たちも近づけず、鬼神も祟ることができず、邪気も身体や皮膚を侵すことができませぬ。一切の病が断絶し、酔っ払いの楽園となる「安楽国」に生まれ、すみやかにさとりを得ることでしょう。」

④ その時地震が発生し、大地が六種類に揺れ動きました。すると、酒仏が地面の下から現れました。その左手にカニのハサミ(おつまみ)を持ち、右の手のひらに酒杯を捧げ持ち、**【図3】**獅子が吼える如く雄壮に、釈尊に申しあげました。

「お釈迦さま、私はある不思議な米汁(酒のこと)を持つて参りました。これはまことに百薬の長であり、悩み苦しむ菩薩たちを慰め、癒す力があります。その香りはあらゆる方向の諸仏・人間・天人の世界に存在する香よりもはるかにすぐれ、最上であります。」酒仏はさつそく酒杯をたぐり寄せて米汁で満たし、爪で酒のしずくを弾いて釈尊に献上しました。その時に立ちのぼった香りはあまねく広がって、無懷山とあらゆる世界(宇宙)を熏じました。

### 【続本文読み下し】

⑤ 時に三千の大衆、この甘露味を嘗め、身意快然たり。吭を鳴らし、舌を鼓し、鼻を動かし、頂を撫でて、未曾有と歎ず。醉龍・醉虎、高陽の酒徒、及び劉伯倫、李太白の輩、俱に涎を垂らし臭を逐い、良醞を恋して已まず。なおその濁を忍ぶ能わず、遂に各自、一大白を傾けてこれを罄し、五体を投じて酔倒す。須臾にして酒力湧き上がり、昏昏騰騰として四方上下を弁ぜず。天を幕とし地を席とし、物を忘れ身を忘れ、耳に雷霆を聴かず、目に泰山を視ず。直ちに酩酊の勝地に入り、大歓喜を得たり。

(次号に続く)

### 【続現代語訳】

⑤ その時三千の人々は、甘露味なる米汁を舐めたところ、身も心も快くなりました。ノドを鳴らし舌鼓を打ち、鼻を動かし、頭を撫でながら「未だかつてない素晴らしいこと」と讃嘆しました。酔っ払い龍と虎、世を捨てた酒飲み達、劉伯倫や李太白のような強者たちが、皆共に涎を垂らして美酒を恋しがり、酒の匂いを追い求めることをやめませんでした。結局渇きに堪えられず、各々が大きな酒杯を傾けて飲み干し、酔い潰れて倒れてしまいました。するとあつという間に酒の力が湧き上がった、朦朧とし、方向感覚も失われ、



【図3】鵬斎が意図した「酒仏」のありようを再現するためにAIを用いて仏画を作成した。大日如来の仏画を出発点とし、冠を酒壺に換え、智拳印を解いて大白(白磁の大酒盃)とカニ(おつまみ)を持たせてみた。カニははさみだけでなく丸ごと一匹だが、「左手にカニを持ち、右の手のひらに酒杯を捧げ」という左右の違いにも注意した。(④ 冒頭 酒仏が地より登場する場面参照)

天が屋根、地面が寝具であるような、豪放磊落な気分になり、外界と自分の区別がつかず、耳には雷の音も聞こえず、泰山も眼に入らない。直ちに酩酊状態の佳境に入り、大いなる喜びを得ました。

### 【註記】

『酒仏経』の一句一語一字には中国古典の引用やパロディが込められています。そのほんの一部を示します。

酣暢無懷山 釈尊が住まう靈鷲山のパロディ。酣暢は飲んで愉快になること。無懷は物思いがいい、あるいは伝説の王「無懷氏」。

七賢八仙 三世紀の中国(三国時代)で活躍した七人の思想家「竹林の七賢」と、杜甫が「飲中八仙歌」に詠んだ八人の酒飲み文人。「八仙」とは本来、道教で信仰される八人の仙人で、杜甫による「八仙」のパロディを鵬斎がさらに踏襲したもの。中国の「飲酒文人オールスターズ」といえるでしょう。

狂花病葉 飲場害馬 酣笑 酒悲

アルコールの精神作用には個人差があり、かならずしも自他に良い影響があるとは限りません。酒の害悪も表現されています。

甘露・醍醐味 神々が飲む不老不死の飲料と最上の乳製品の味。

般若湯 現代の仏教寺院でも用い

られる、酒を指す「隠語」。仏教では不飲酒戒が定められているが、律には酒を薬用する例外規定もみられ、後世の「般若湯」はその拡大解釈ともいえましよう。

**蟹螯** カニのハサミ。最上の酒の肴の代名詞。畢卓「片手に蟹螯、片手に酒杯を持ち、酒の池を泳げば、人生は十分。」(1)【図3】

**一大白** 大きな酒の盃のこと

**百葉の長** 古代中国の書「食貨志」にあり。王莽が酒の専売を行う際に述べた言葉として知られる。現代においても呑んべえの抗弁・飲酒を正当化する常套句である。

**甲を蘸する** 酒杯に爪を浸して酒のしずくを弾くこと。唐代の酒宴の作法。唐詩にも現れる。中国古典の酒宴語彙を使って仏への供養・献供を酒宴の献酒儀礼へすり替えた、鵬斎ならではのパロディ。

**五体を投じて酔倒す** 五体は全身の意。仏、高僧に対し額・両肘・両膝を地に着けて礼拝する「五体投地」に「酔い倒れ」が掛かる。

**幕天席地** 「竹林の七賢」の一人劉伯倫作「酒德頌」の有名な句。(1)泰山 中国山東省にある最上の聖地。

### 【学問・文化と薬物依存】

アルコールやニコチンなどの依存性薬物は学問・芸術・文化の歴史に大きな足跡を残した偉人

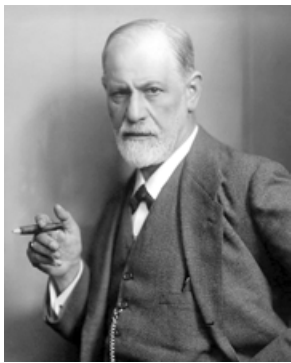
たちに悪影響を及ぼしてきました。それは偉人たちを尊崇する後進の者たちにも大きな損失を及ぼすものです。

偉大な学者の学問を学ぶこと、その人の薬物依存まで模倣することはまったく別の話です。しかし精神医学の歴史にも、典型的な例があります。

「精神分析の父」として精神科医や心理学者から尊敬されてきた、ジグムント・フロイト(1856～1939)は、葉巻を毎日20本吸う喫煙者でした。主治医から禁煙を勧められてもやめることはなく、顎および口腔のがんで30回以上の手術を受け、狭心症に罹り、83歳でがんで亡くなるまで喫煙していました。(8)(9)【図4】

近年の我が国の調査でも、精神科医は他の診療科の医師より喫煙率が高いことが指摘されて

【図4】フロイトの肖像 彼の喫煙は後世の精神医学に大きな禍根を残した。(10) 抱一(11) 抱一(12) (Wikipediaより)



います。(10)

紙巻きタバコの喫煙が体と心の健康に及ぼす影響について十分に認識されてこなかったこと、そして精神科領域では長年「喫煙は患者の自己治療」「喫煙だけが患者の楽しみ」「禁煙は精神疾患に悪影響」「精神疾患の患者には禁煙できない」といった医療者側の思い込みから、禁煙治療や精神科病院の禁煙化が遅れてきました。タバコ産業も「自己治療仮説」の研究に資金を提供し、精神疾患患者を対象としたタバコ製品の販売促進を行いました。(11)

### 【『酒仙経』前半のまとめ】

中国における酒の歴史は文学よりも古いとされ、紀元前7千年紀には米、蜂蜜、果実を用いた発酵飲料が作られていたことが、土器に残る有機物の化学分析から

【図5】『酒仙経』の挿絵 酒井抱一作 酒壺にもたれる李白が描かれている抱一は下戸であった(4)より



明らかにされています。また商(殷)の時代には、神や祖先に酒を献じる祭祀用の青銅酒器が盛んに作られました。

酒は神への献上品として、祭祀に不可欠な聖なる飲料であると同時に、人を滅ぼすものという二面性が認識されてきました。しかし、中国の文人は「酒によって詩才・自由・忘憂を得る」と語り、大酒飲みが魅力的な哲学や詩作を展開し、日本にも伝わりました。【図5】

鵬斎も酒の二面性を分かった上で、酒を讀める文人の伝統を受け継ぎ、「酒仙」という極端な表現で「結晶化」したのが、この『酒仙経』といえるでしょう。今回は後半部分を紹介、解説いたします。

### 【参考文献】

- (1) 石井公成 仏説摩訶酒仙妙楽経 謹解 駒澤大学仏教文学研究 第12号 P 37～88 2009年。※『酒仙経』解説
- (2) 石井公成 亀田鵬斎と『仏説摩訶酒仙妙楽経』新潟県文人研究 第12号 P 46～55 2009年。
- (3) 石井公成 亀田鵬斎と『仏説摩訶酒仙妙楽経』(続) 新潟県文人研究 第13号 P 77～84 2010年。
- (4) 足立区郷土博物館収蔵資料データベース「仏説摩訶酒仙妙楽経」資料 ID 1329。

※『酒仙経』板刻写真データ  
(5) かとうゆずか「仏説摩訶酒仙妙楽経 呑んべえによる呑んべえのためのお経。」マンガ仕立の紹介記事



(1) (4) (5)

(6) 杉村英治『亀田鵬斎』1985年 三樹書房。

(7) 『金巖先生師辨』筑波大学デジタルコレクション。

(8) ロンドンフロイト博物館ブログ「フロイトと葉巻」2020年。

(9) Hall SM, Prochaska JJ. Annu Rev Clin Psychol. 2009; 5:409-431.

※全文PDF取得可

(10) 日本医師会 2024年日本医師会員の喫煙意識調査の結果について 2025年4月2日。

※精神科医の喫煙率が高い

(11) 【和訳】喫煙と精神疾患のつながりを断ち切る 日本禁煙学会 ホームページ。Prochaska JJ N Engl J Med. 2011;365:196-198.



(8) (11)

## 「佛國山」からの要諦流布 其の壺

妙光寺 山 縣 洋 典

## 一華開五葉 結果自然成

※吾れ本と茲の土に來たり、  
法を伝えて迷情を救う。

一華五葉を開き、  
結果自然に成る。

これは、インドから中国に渡  
來した達磨大師が、弟子の慧可  
に述べた言葉と言われています。  
解釈は、様々にて自身の後継者  
が皆立派に成長し、その後の中  
國の地に根付くことを予見した  
という説が有力ですが、五弁の  
花びらを五智になぞらえている  
との説も伝わっています。

※五智 法界体性智、大円鏡  
智、平等性智、妙觀察智、  
成所作智

いずれにしても、達磨大師の  
存在があったからこそ今日の禪  
宗、そして曹洞宗がなされた事  
には違いありません。

大師は、南インドの香至国の  
第三王子に生まれたとされてい  
ますが、その詳細は不明です。  
私見ですが、風貌から考えるに

アーリア系ではなく、古代イン  
ダス文明を築いた今日まで南イ  
ンドに多く居住するドラビダ系  
の末裔と思われます。それは、  
他の民族より皮膚が褐色で彫り  
の深い面相と、眉毛や髭などの  
濃い体毛がそれを醸し出してい  
るからです。

三十数年前、インドを訪れて  
いた際、北方と南方では全く異  
なった社会が形成されており、  
本場に一つの国家なのかと思っ  
たくらいでした。前記したよう  
に、容姿だけでなく、生活習慣  
や言語も違ったからです。一応  
共通言語は、ヒンディー語です  
が北はビルが建ち、舗装道路が  
整備されて近代化が加速してい  
り、多国籍企業では洗練された  
英語も常用されていました。一  
方南では、ドラビダ系のタミル  
語が主流にて、言うなれば下町  
のイメージで牛が赤土の轍の残  
る道路を我が物顔で闊歩し、犬  
や鳥の鳴き声がそこら中でして  
いました。

そのような社会環境の差異が  
ある中、南方の方々からは、自

分たちの先祖が今のインド文化  
の根幹を成した誇りと、個々の  
力を信じてそれぞれの目的を遂  
行する強い意志を感じられた次  
第です。私は、こうした事を考  
慮し達磨大師が仏教への真摯な  
帰依と、強い信念を持ち中国に  
渡ってきたと考えています。

大師が初めて、正式に中国史  
に登場した記録は五百四十七年  
（六世紀中旬）に記された「洛陽  
伽藍記」です。しかしこの文献の  
中の大師は、外国人僧として登  
場しており、残念ながら個の功  
績は、詳細には記されていない  
ようです。

勿論いうまでもなく、大師の  
その力量が遺憾なく発揮された  
のは、梁の武帝とのやり取りで  
しょう。仏教を篤く信仰し、多  
くの寺院建立や經典編纂、僧侶  
育成を支援してきた武帝が、そ  
の功德を質問した際、大師は「無  
功德」とただ一言で返答されてい  
ます。

近年、携帯電話での通信手段  
の一つとして、専用アプリ内で  
努めて短文での画像や文言によ  
る意思疎通が多くなされていま  
す。その状況を踏まえると、達  
磨大師が発した「無功德」の一言  
は、言わば現代社会における意  
思伝達の最先端なのかもしれま

せん。

さてこの言葉を文字通り解釈  
するなら、功德（この場合武帝が  
積み重ねてきた善行の数々）には  
意味はないとなるでしょう。こ  
こで一つ考えてみたいのは、「功  
徳」と「公益」についてです。  
乱暴に解釈すると「公益」とは、  
善行により神仏からの「褒美」（予  
想外の幸運）の事、「功德」は善  
行の継続による良き心の活性化  
です。

因みに、武帝は国力が衰退し、  
国家基盤が揺らぐほど仏教流布  
に貢献し、また身分や家柄に捉  
われない試験制度（科擧の元）な  
ども施行した大宰相でした。然  
し達磨大師は、武帝が「功德」を  
積んだ事は当然既知であったが、  
その「公益」（対価や見返り）  
を考察した瞬間に、仏法の本質  
とは対極にあ

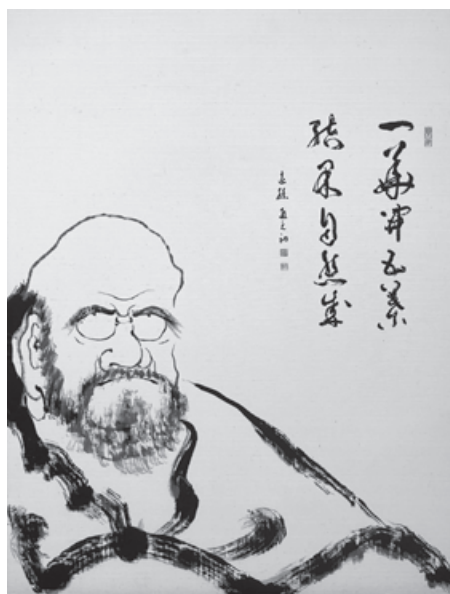
る単なる経済  
活動となっ  
た。だからこ  
そ、厳しい言  
葉で戒めたの  
だと推測され  
ます。

残念ながら  
武帝は、その  
意図が十分に  
くみ取れず結

果的に二人は、袂を分けてしま  
います。しかし、達磨大師（一華）  
はその後も中国に留まり修行を  
続けられ、慧可、僧璨、道信、  
弘忍、慧能の五葉が開いたの  
です。

いずれにしても、私は武帝が  
達磨大師を自國に招聘してくれ  
たからこそ、前記したように今  
日の禪宗、そして曹洞宗がある  
と考えます。そしてその経緯を  
鑑みると、私は武帝に関して深  
く感謝の意を表します。

何故ならば「結果自然成」、様々  
な出来事が折り重なり積み重  
なつて、何百年も前の出来事が  
今の仏道に殉じる自分の存在に  
も深く関与している、だからこ  
そ「功德」を積むことを怠っては  
ならないと思うからです。



テレホン法話 (〇八九七四一〇〇三三)

# 禪のたより



## ◆お盆の供養

お盆を迎えます。関東地方は七月盆ですが、多くは月遅れの八月十三日から十六日の間を「盂蘭盆会」と呼び、家族皆で分担をして仏壇やお墓のお掃除をし、精霊棚に花や供物を供え、先祖様をお迎えし感謝と報恩の日々を過ごします。

「盂蘭盆」の語源は、サンスクリット語の「ウランバーナ」で一般的には逆さに吊り下げられた苦しみと云う意味があります。

お釈迦様の十大弟子の一人である目連尊者が、育てて下さったご恩返しをしようと神通力をもつて死後の母親を探します。

しかし母親は餓鬼道に落ちて飢えと渇きに苦しんでいました。それは我が子目連を溺愛するあまり、周りの人の悲しみ苦しみに無関心で、我欲を満たそうとする貪りの心が強すぎ、亡くなってもその心だけは消えなかったのです。苦しむ母親の姿を目の当たりにし、ご飯を届けますが火となり食べる事が出来ません。目連尊者は自分を育てるために貪りの心を起こし餓鬼道に墮

ちたのでないかと、激しく泣き叫びお釈迦様に相談します。

目連尊者には優しい慈愛に満ちた母でしたが、周りの人の心には亡くなつてからも餓鬼の姿としてしか映つてなかったのです。それが餓鬼道に墮ちたと云う表現になり、目連尊者にとつては悲しい出来事でした。

当時インドは約三カ月の雨季があり、修行僧は精舎にこもつて坐禅に励みます。これを雨安居（うあんご）と云います。この雨安居の最終日が旧暦の七月十五日つまりお盆の日です。修行僧たちには自分を振り返る最も大切な日になります。

お釈迦様は目連尊者に施しの心をもつて、修行僧にあらゆる供物をささげなさいと教えます。貪りの心は根が深いけれども、施しの心はそれよりも広大無辺の功德が在るのです。その功德によつて目連尊者の悲しみも消え、同時に母親は極楽往生を遂げたと言われています。ここから盂蘭盆の意味が施しに大転換します。母親を思う目連尊者のお話が、先祖様がこの世に帰つ

てくるといふ日本古来の風習と重なり、家族皆でお互に命ある事をご先祖様に感謝する日として鎌倉時代頃からお盆の風習が始まり、江戸時代に広く行われるようになりました。

この事を忘れずに、ご先祖様を自分の心にお迎えし、先ずは姿勢を調え、息を調えて、心静かに「ありがとう」と手を合わせましょう。そしてご縁のある全ての人に施しの心をもつて接する事が御恩返しとなります。それがお盆の供養です。

副典座 楠本 剛大  
令和八年八月十日

## ◆今、この一歩

今日は、「今、この一歩」というお話をしたいと思います。

皆さんは、こんな経験はないでしょうか。朝、車を運転して目的地に着いたのに、「途中の景色をほとんど覚えていない。」そんなことはありませんか。

運転はちゃんとしていたはずなのに、頭の中では今日の予定を考えたり、昨日の出来事を思い返したり。体は車の中にあつても、心は別の場所へ行つていたりします。

実は、私たちの日常には、この

ようなことがよくあります。食事をしながら仕事のことを考える。相手の話を聞きながら、自分は何を話そうかと考えている。子どもと遊んでいるのに、明日の予定が気になっている。体は「今」にあるのに、心は「今」にいない。すると、気づかないうちに心が疲れてしまうことがあります。

禅では、そのような心に気づき、  
「今、この瞬間に戻ることを教えています。

禅には、こんな有名な言葉があります。

「悟る前は薪を割り、水を運ぶ。悟った後も薪を割り、水を運ぶ。」

悟ったからといって、特別な人になるわけではありません。

朝になれば起き、掃除をし、ご飯をいただき、仕事をする。やることは何一つ変わりません。変わるの、その一つひとつに向き合う心です。

薪を割るなら薪を割ることに心を向ける。

水を運ぶなら水を運ぶことに心を向ける。

目の前のことを、目の前のこととして丁寧に扱う。それが禅の教えです。

私たちは、「人生を変えたい」と思うと、何か特別なことを探して

しまいます。

けれども、人生は特別な一日で変わるものではありません。今日という一日を、どのような心で過ごすか。その積み重ねが、未来をつくっていきます。

今日はほんの一つだけでも、「今」を味わう時間をつくってみませんか。

お茶を飲むときは、お茶の香りを味わってみる。空を見上げて、風を感じてみる。誰かの話を、最後まで静かに聞いてみる。

そんな小さな一歩が、慌ただしく動いていた心を、そつと「今、この瞬間へと連れ戻してくれます。今日という日は、一度しかありません。どうぞ、このかけがえない「今、この一歩」を大切に過ごしてください。

看福 森 香有  
令和八年九月十日





弁天大祭



筆供養

■筆供養・弁天大祭  
七月三十日(木)(旧暦六月十七日)に恒例の筆供養・弁天大祭が行われました。  
当日午后より山門頭広場の筆塚前にて、古筆の焼却供養が行われ、夕刻には、弁天堂にて、弁天大祭が行われました。



■住友展墓

八月六日(木)、当山西側へ安置されている別子銅山殉職者流亡者慰霊碑等で盆供養を厳修いたしました。



盆供養

■夏安居解制

入制以来、三ヶ月。首座を中心に、辯道精進を続けた夏安居は、楞嚴会満散・土地堂念誦、小参・人事行札等の諸行持を勤め、無事解制しました。



小参

七月の日鑑

- 一日 祝祷
- 五日 日曜参禅会
- 四国地区理事会参禅
- 十二日 日曜参禅会
- 祝祷・略布薩
- 十五日 観音講(仏教勉強会)
- 十八日 日曜参禅会
- 廿日 先住忘
- 廿六日 日曜参禅会
- 廿日 筆供養・弁天大祭
- 廿一日 略布薩

八月の日鑑

- 一日 祝祷
- 二日 日曜参禅会
- 住友展墓
- 六日 楞嚴会満散・土地堂念誦
- 七日 小参・人事行札
- 八日 日曜参禅会・淡交会供茶会
- 九日 祝祷・略布薩
- 十五日 日曜参禅会・水施食
- 十六日 観音講(仏教勉強会)
- 十八日 淡交会学校茶道坐禅会
- 廿日 日曜参禅会
- 廿三日 日曜参禅会
- 廿日 略布薩

九月の予定

- 一日 祝祷
- 三日 住友金属鉱山新人役員研修
- 六日 日曜参禅会
- 七日 愛媛県宗務所第五教区護持会団参
- 十三日 日曜参禅会
- 十五日 祝祷・略布薩
- 住友金属鉱山白水会参拜

十八日 観音講(仏教勉強会)

- 廿日 日曜参禅会
- 廿二日 開山忌
- 廿三日 宝篋印塔供養
- 廿七日 日曜参禅会
- 廿九日 両祖忌
- 卅日 略布薩

十月の予定

- 一日 祝祷
- 四日 日曜参禅会・住友供養
- 十一日 ボーイスカウト参禅
- 十一日 日曜参禅会
- 十五日 祝祷・略布薩
- 十八日 観音講・聖護寺秋法要
- 十九日 日曜参禅会
- 島根県第二宗務所第九教区護持会団参
- 廿五日 日曜参禅会
- 卅一日 略布薩



鐘 声

七月八月と酷暑日が続き、日中はケンな暑さ。早晨課中に境内を洒掃、大衆の威神力有難し。秋彼岸が近づくにつれ、季節の移ろいを僅かに感じ無常の尊さを実感いたします。

たぎりは、はいとなる、さらにかへりてたぎりとなるべきにあらず。しかあるを、灰はのち、薪はさきと見取すべからず。

春秋夏冬大自然の中にあり、日日の行持にて自己を忘るるのが僧堂の生活。昨今の世相の変化のスピードも申すまでも無いが、刹那消滅の理を忘れては自己を見失ってしまします。曆に目を向け、立秋の文字に秋のすずしきを感じる酷暑の夏でした。(道)

当山三十一世 大孝徳存大和尚小祥忌法要

令和八年十二月十三日(日) 逮夜諷経 十六時より

令和八年十二月十四日(月) 正當諷経 十時より

ご随喜頂ける御寺院様はお手数ですが、人数把握の為、瑞應寺までご一報頂ければ幸いです。

尚、瑞應寺安居者は安居会事務局等へご一報お願いします。